

分科会Ⅳ

12月4日（木）9：00～15：00／国際会議室301

座 長 社会福祉法人桜井の里福祉会 理事長 佐々木 勝則 氏

座 長 有限会社プランニングフォー 代表取締役 若野 達也 氏

テーマ「【地域貢献・地域連携、地域拠点・認知症カフェ、
認知症伴走型支援、若年性認知症、地域包括
ケア・共生社会】＋【感染症実体験、自然災
害実体験、感染症対策、自然災害対策、BC
P】」

時間	演題 / 副題	所 属	発表者 (都道府県)
9:00 }	災害に備えて今できる事 ～その先の安心の為に～	グループホーム寿限無	新居 幸 (東京都)
9:15 }	能登半島地震 グループホームで働く私が被災地支援をする理由	グループホームつどいの家 桜町	高橋 築 (新潟県)
9:30 }	青森県内における認知症対応型グループホームBCP（業務継続計画）の現状と課題 ～自然災害編・感染症編 作成進捗状況の把握と今後のブラッシュアップにむけて～	弘前医療福祉大学短期大学部	中村 直樹 (青森県)
9:45 }	利用者と地域との交流 ～毎日出かけよう～	グループホームうぐいす	グルンクマリ (佐賀県)
10:00 }	大和橋を使ったお香作り アクティビティから有償就労への可能性についての模索	グループホーム 古都の家 学園前	片桐 藍 (奈良県)
10:15～ 休 憩			
10:30 }	緊急の緊急！ショートステイ 介護の工夫ありき	グループホームユピテル三田	奥野 広子 (兵庫県)
10:45 }	地域課題からの活動づくり 出張カフェを行い見えてきたもの	グループホーム府中みどり園	伊名波宗一郎 (広島県)
11:00 }	グループホームから共生社会をめざす 地域の「嫌われ施設」から生まれ変わったももか	グループホーム ソラストももか太子	上埜美恵子 (兵庫県)
11:15 }	いつでも好きに使ったらえんじゃけえ 地域に見守られて 人と人を紡ぐ	グループホーム千同ひまわり	讀井 晴代 (広島県)
11:30 }	共用デイとショートステイを経験して 入所までにつながった例	グループホームせせらぎ	山中 徹 (佐賀県)
11:45 }	ともにつくる作品展～私たちの希望宣言～ 地元小学校との相互開催から導く地域共生の実践	グループホームわしま	八子 美紀 (新潟県)
12:00～ 昼食休憩			
13:15 }	みんなでやろう！結カフェ 利用者様主体で行うカフェ開催の取り組み	グループホーム ジョイフル各務原	今井 麻裕 (岐阜県)
13:30 }	繋がり 思い出に染まった場所	グループホーム寿限無	児島 勇作 (東京都)
13:45 }	地域参加への役割 地域の人との共生、繋がりを目指す	グループホームジョイフル江南	大澤 和美 (愛知県)
14:00 }	認知症になっても安心な地域づくり ～認知症カフェから広がる認知症の正しい理解と繋がり～	グループホームこまくさ	町羽 学 (岡山県)
14:15 }	家族と一緒に楽しめるグループホーム生活 ～24時間いつでも来て下さいね～	グループホームユピテル三田	李 恩淑 (兵庫県)
14:30 }	一人じゃないを支える共用型デイの力 ～あいむ共用デイの現在（10年の積み重ねから）～	グループホームあいむ	青木 友香 (東京都)
14:45 }	三滝自由区へぜひ一度おこしてください！その後 ～そこで何が生まれるかは参加していただくみなさん次第です～	グループホーム三滝ひまわり	玉田 将之 (広島県)
総 評			

災害に備えて今できる事

◆キーワード

- 1 地域拠点
- 2 災害対策
- 3 BCP

～その先の安心の為に～

東京都・八王子市

にんちしょうたいおうがたきょうどうせいかつかいご ぐるーぷほーむ じゅげむ
 認知症対応型共同生活介護 グループホーム 寿限無

にい みゆき

発表者：介護福祉士・新居 幸

医療法人が運営しているグループホーム。同法人のクリニックとの医療連携が強みである。

めじろ台地区の中心に位置した丘の中腹にあり、2ユニット18名の入居者様が生活され、2ユニットで共用型デイスサービスも開設。同法人の病院・クリニックが近くにあり、医療連携が充実している。

(取り組んだ課題・はじめに)

近年風水害等の自然災害が頻発しており、当ホームがある八王子市は南海トラフ地震や首都直下型地震(多摩東部直下地震)の際には、震度5弱から6強程度の揺れが想定される区域となっている。

当ホームでは、令和6年度のBCP作成に伴い、災害対策委員会を発足し、災害に対する備えを進めていくことになった。備蓄食料等の管理を行っていく中で実際に災害が起きた際に、今の備えだけで十分なのか？不安要素を取り除く為にできる事はないのか？を模索・検討し、災害時の食事や食事方法、備蓄品等を演題発表のテーマとした。

(倫理的配慮)

入居者様、利用者様、家族様、並びに施設職員に取り組みの概要をご説明し同意を得ています。併せて写真使用等のご承諾も頂いています。

(具体的な取り組み)

- ①東京都福祉局の災害備蓄品配布も活用しながら、食料品のローリングストックを行った。
 - ②停電時でも温かい食事が摂れるように、カセットコンロ・ボンベを用意した。
 - ③想定している物品のストック数が妥当なのかを確認するため、実際に使用する機会を設けた。
- 炊き出し訓練の実施(11月)
- ④備蓄品使用数の確認と補充。
 - ⑤前回訓練の反省を踏まえた上での再訓練の実施。(4月)

(活動の成果と評価)

11月の炊き出し訓練では、土鍋で炊いたご飯を混ぜご飯にしておにぎりにした。屋外では豚汁を作り、そのまま提供できるバナナを添えた。火を扱う調理は屋外で行ったが、寒空と具材の多さから中々温まらず時間を要した。調理に使う水やカセットボンベの使用数は概ね想定通りだったが、大勢が食べる事を想定した場合には、カセットコンロの追加が必要と分かった。

4月の炊き出し訓練では、保存の効く食材のメニューに挑戦をした。高野豆腐を使用したキーマカレーや、わかめご飯のアルファ化米からわかめを抜き、スープに入れて活用したりと工夫を凝らした。コンロを増やした事で調理しやすくなったが、強風に悩まされる場面や水が想定以上に必要になった事等反省点も多くあった。調理の場所が屋内、屋外に分かれたが職員同士で連携が取れスムーズに行えた。ただ、必要物品の出し入れは災害対策委員で行った為、他職員は備蓄品の詳細を把握しきれておらず、混乱が露呈した。

2回とも屋外で行った為、入居者様より「寒い」「風で器が飛ぶ」といった訴えが聞かれた。洗い物を減らす為に、使い捨て容器を使用した、普段の食器にラップを掛けたり、ビニール袋調理をする等、色々試す余地がある事を改めて気付かされた。

(今後の課題・考察・まとめ)

- ①災害備蓄品の詳細を一部の職員しか把握していない為、周知を進めて誰でもすぐに物品のリストを確認ができ、使用できるようにしておく。
- ②災害時でも簡単に保存の効く材料で作れるようなメニューを検討し、それに伴う材料をストックしておく。
- ③天候によって左右されないような対策が必要。
- ④入居者様の体調を考慮して、屋内での実施も検討。
- ⑤手間となり得る物や、節約を考えた対策を調べ、実践していく。

2回の炊き出し訓練を通して、想定通りできた部分も大いにあったが、回を重ねる毎に新たな課題が見つかった。定期的に訓練を行う事で、様々な対策を講じ、いざ災害が起きてしまった時の不安を少しでも減らせるように、今後も継続して取り組んでいきたい。

(参考・文献など)

なし

能登半島地震

◆キーワード

DCAT

大切な出会い

直接感じた経験、気づき

グループホームで働く私が被災地支援をする理由

新潟県・燕市

しゃかいふくしほうじんさくらのさとふくしかい

社会福祉法人桜井の里福祉会 グループホームつどいの家 桜町

発表者：介護職員 高橋 築

平成 27 年 3 月開設 小規模多機能ホーム併設

2 ユニット定員 18 名

「住み慣れた地域でいつまでも暮らしたい」を基本理念とし、お一人おひとりのこれまでとこれからの暮らしを大切にしていこうと支援していきます。

(はじめに)

桜井の里福祉会は東日本大震災をきっかけに災害派遣介護チーム DCAT を設立。熊本地震、茨城県常総市の水害など有事の際は被災地で様々な支援を行ってきた。令和 6 年 1 月 1 日に発生した能登半島地震では物資の搬入、利用者の安全な地域への移送、直接ケア、相談支援と時間の経過から変わっていくニーズに合わせて支援活動を継続した。私は地震発生から 2 日後の 1 月 3 日から DCAT として初めて被災地支援を行った。被災地での大切な出会いや現地で直接感じた経験や気づきからグループホームで働く私が被災地支援をする理由を見つけることが出来たので発表したい。

(倫理的配慮)

今回の発表についての、資料・写真等は、関係者の了解を頂いている。

(被災地の悲惨な現状)

特に被害が甚大であった輪島市にあるグループホームへ物資の搬入をすることを第一の目的とし現地へ入った。しかし土砂崩れによる悪路で時間が掛かり、輪島市までたどり着くことが出来ずに隣の穴水町で日没を迎えることとなった。車中泊する事も想定し準備をしてきたが偶然に立ち寄った場所が穴水町の福祉避難所であった。そこへ避難してきた地元住民で介護を必要とするお年寄りとその家族が身を寄せていた。家族はつきっきりで介護しており十分に休めていない状態だった。私たちは家族に変わり、排泄面の介助や見守りを行いながら一晩福祉避難所で過ごすこととなった。

(大切な出会い)

トイレで体調を崩しているお年寄りがいるという知らせがあった。近所に住むという方から話を聞くと家族に会うことが出来ず一人で避難してきており、遠慮しているのか地震発生から一度も横になる事がなかった事がわかった。家族に変わりそっと寄り添って一緒に横になることで安心されたのかようやく休むことが出来たようである。グループホームで働く中で、自宅から離れて不安で眠る事が出来ないご

利用者と寄り添ってきた経験を活かす事が出来たと感じた。また被災地にいて緊張していた私だったが人の温もりを感じ心が安らぐ時間となった。他の避難者の方々も同様に家や家族、これからの生活の事など様々な不安からゆっくり休むことができていた。しかし私たちは不安な話をずっと傾聴しただけではなく、お互いの家族や地元、仕事の話、時には冗談言いながら笑いが出ることもあり被災地であることを忘れるような瞬間もあった。話の中で輪島まで物資を届ける目的を知り、道路状況が悪く迂回しながらではあるが輪島市まで行く事が出来ることを私達に地図を見ながら一生懸命伝えてくれた。この会話がのちに私達の助けとなった。明るくなると同時に穴水町を出発し、輪島市のグループホームへ向かった。出発するときに感謝と激励の言葉をもらい心の活力となった。知らない土地から来た私たちを温かく受け入れてくれたことへの感謝の気持ちでいっぱいになった。目的地へ向かう道中、悪路で通れる道が限られている事と分からない道という事もありスマートフォンのナビに頼ったが通信状態が悪く使用できずに自分たちのいる位地すら把握できない状態になった。そんな時に役立ったのが福祉避難所でストーブを囲んで現地の人が教えてくれた情報だった。現地の人から直接を聞かせてもらった情報の大切さを感じた。このように直接現地でしか感じる事の出来ない経験や気づきがある事が多くあることが分かった。

<まとめ>

普段グループホームで働く私が被災地の役に立つことが出来るのであろうかと不安でいっぱいだった。しかし支援を通してグループホームで働く中で大切にしてきた同じ目線、立場になってそっと寄り添う事、相手の思いや暮らし、大切にしている事を知ろうとすることが被災地でも活かすことが出来たと思う。能登半島地震の被災地支援を行ったことにより自分がやってきたグループホームでのケアに自信を持つことが出来るようになった。また現地の人からもらった温かさは現在も私の活力となっている。

青森県内における認知症対応型グループホーム BCP（業務継続計画）の現状と課題

◆キーワード

- 1 BCP
- 2 災害対応
- 3 訓練（シミュレーション）

～自然災害編・感染症編

作成進捗状況の把握と今後のブラッシュアップにむけて～

青森県・弘前市

がっこうほうじんひろさきじょうとうがくえん ひろさき いりょうふくし だいがく たん き だいがくぶ

学校法人弘前城東学園 弘前医療福祉大学短期大学部
（日本認知症グループホーム協会青森県支部）

なかむら なおき

発表者：准教授（社会福祉士・防災士）・中村 直樹

なかがわ たかひと あらや ゆうこう なるみ けいすけ

共同研究者：中川 貴仁・荒谷 雄幸・鳴海 圭佑

・保健・医療・福祉に特化した専門職養成大学・短大
・発表者らは、学内「地域安全防災研究所」の活動として「福祉系 BCP」を研究しており、介護施設等での BCP 作成・訓練等に際し指導・助言にあたっている。

・今回は、日本認知症グループホーム協会青森県支部の協力を仰ぎ、県内に所在するグループホームに対し、BCP 策定状況、BCP 作成実態・課題等についての質問紙調査を実施したので、その結果を報告し、今後の展望を示す。

（取り組んだ課題・はじめに）

BCP（Business Continuity Plan）は、自然災害や感染症発生等、不測の事態が生じた場合においても利用者及び職員を守り介護サービスを継続させることを目的としている。2021（令和3）年度介護報酬改定以来、策定・研修・訓練を実施することとなり、2024（令和6）年度からは完全義務化となっている。

2024（令和6）年度に弘前医療福祉大学短期大学部学長指定研究の助成を受け、青森県内に所在する認知症対応型共同生活介護（グループホーム、以下 GH）に対し、質問票によるアンケート調査を実施した。

今回は、本研究において有意差が出た結果について明らかにするとともに、課題について考察する。

（倫理的配慮）

- ①調査協力依頼書には、調査研究の目的（趣旨・方法）、調査への協力については本人の自由意思によるものであること、収集したデータについては研究目的以外に使用しないことを明記した。
- ②調査票は無記名かつ郵送による回答方法とし、結果分析時に本人が特定されないように配慮した。研究への同意は、質問紙面冒頭にチェックボックスを設け確認した。
- ③成果発表等について、研究結果を論文やその他の方法で公表する際は、施設名・個人名が特定されないよう配慮する。また、研究結果を知りたいという協力者の要望には、誠実に応える。

（具体的な取り組み）

対象・方法 青森県内 GH に所属する職員のうち、実際に BCP 作成に際しリーダーとして携わった者を対象に質問紙調査を実施し、得られた結果を分析・整理した。主な質問項目としては、1. 基本属性、2. BCP 策定状況及び進捗レベル（自然災害編・感染症編）、3. BCP 策定参画者及び体制・方法、4. BCP 理解度、5. 研修実施体制、6. 訓練実施状況、7. 緊急時における地域との協力支援体制、等の項目を設けた。

（活動の成果と評価）

結果 回答回収率は 30.0%（92/307）であった。主な結果（概要）として、基本属性中の「BCP 策定に際してリーダーになった理由」では、回答者の 8 割強が「役職者（管理者・計画作成担当者）だから」と回答しており、後段「体制」の項目においても半数の GH は策定が管理者に集中している実態が明らかとなった。「所属 GH の立地状況」については、警戒区域等に該当しない GH が半数に上る一方、浸水想定区域内である GH が 35%、土砂・津波等も若干該当しており、このうち 79.1% が当てはまる災害種別について想定した訓練（シミュレーション）を実施していた。策定状況は、自然災害編・感染症編ともに約 9 割が策定済みであった。理解度について、目的・必要性・義務化の認識は高いものの、作成手順については前述より劣る結果となった。「研修」については「策定した BCP の内容の理解に関すること（68.2%）」、また、「訓練」については「自然災害または感染症に関する図上訓練またはイメージトレーニング（68.4%）」が最も高かったのに対し、上述いずれも該当する 28 の GH 中、想定した季節が「春季・秋季のみ」が 50.0%、また、想定した時間が「日中帯のみ」が 71.4% であった。自由記載に、「BCP に関する正解が示されていないため減算に怯えている」「訓練方法を教えてほしい」「BCP 訓練実施時の記録の残し方が不明」等の記述があった。

（今後の課題・考察・まとめ）

本研究により、県内 GH の多くが BCP 策定に取り組んでいるものの、作成・修正後の研修・訓練等のブラッシュアップに悩んでいることが明らかとなった。また、避難訓練と BCP 訓練の内容が混同している点も挙げられたことから、これらの共通認識を図る研修実施等の必要性も示唆された。今後さらに、詳細に各項の有意差を割出し分析するとともに次回調査等に向け準備する予定である。

利用者との交流

◆キーワード

- 1 ネパール
- 2 地域交流
- 3 野菜づくり

～毎日出かけよう～

佐賀県

グループホーム うぐいす

発表者： グルン・クマリ

 きしかわ あい
 共同研究者： 岸川 愛

 グループホームうぐいす1ユニット
 (小規模多機能型居宅介護と同一建物)

 私たちは5つのならばを実践します。
 1 自分の親ならば2 自分が逆の立場ならば3 自分の家族
 ならば4 地域の一員ならば5 介護サービスというサービ
 ス業ならば

(取り組んだ課題・はじめに)

日本に来て一年間は、学校に通いながら週末はアルバイトという生活を送っていました。学校でも職場でも、ネパール人は私一人でした。最初はいつも一人で過ごしていたので寂しかったです。そのうちに近所の方と仲良くなり、家でお話ししたりネパール料理を作って一緒に食べました。また、近所の方の家の前に空いていた土地と一緒に野菜を作りました。ネパールは農業中心の国です。農業が主要な産業であるネパールでは、国民の約 65%以上が農業に従事しています。農業は、仕事の中心であり、多くの家庭が農業で生活をしています。私の家族もネパールで野菜づくりをしており、日本でも農業をしたい、さらに利用者様を交えて農業をしたら、利用者様や地域との交流が深まり楽しいのではないかと考えました。

(倫理的配慮)

発表を行うにあたり、事前に本人、家族に説明を行ない、同意を得ております。

(具体的な取り組み)

①地域の方と利用者様と交流(畑、イベント、料理、野菜の販売)

施設の横にある畑を借りて利用者様と一緒に野菜のお世話をしました。施設の利用者様も畑を見に行くのが楽しみとなり、畑まで『毎日出かけよう』と言われました。利用者様と一緒にその畑でとれた野菜を使用した料理をつくり利用者や地域の方に提供しました。また、畑でとれた野菜の社内販売もしました。

②ネパールのことを知って頂く機会をつくる
 地域の方とご家族を対象に施設の敷地内でマルシェを開催しました。そのマルシェでネパールのブースを設けネパールのことを知って頂きました。(衣装展示、郷土料理提供、文化の掲示)

(活動の成果と評価)

- ・利用者様と地域の方々と一緒に協力しながら様々な野菜を作りました。
- ・畑で野菜をすることで、利用者様が畑まで『毎日出かけよう』と言われるようになりました。散歩や野菜のお世話をする楽しみが増え、地域の方々とのコミュニケーションも徐々に増えてきました。
- ・採れた野菜を職場の方に提供したり、販売したりしました。沢山の方から褒められ、更に仕事に対する熱意ができました。
- ・施設でもネパール料理を作って利用者様に提供を行いました。また、施設でご家族と地域の方々を招いてマルシェが開催された時は、ネパールのブースを設け、民族衣装を会場に展示し、ネパールの文化を掲示し異文化交流が出来ました。ご家族や地域の方にもネパール料理も振る舞い「美味しい。もっと食べたい」と言って頂き更に交流が深まった。

(今後の課題・考察・まとめ)

- ・畑を借りて農業を始めたことで、利用者様と地域の方々から良い反応があり、沢山の方と交流を深める良い機会となった。
 - ・利用者様から『毎日出かけよう』と言われ、野菜の観察や収穫など一緒に楽しく過ごすことも出来ました。
 - ・歩行が少し困難な利用者様と施設から畑までの距離を少しずつ歩いていくことで利用者様の歩行訓練にもなりました。
 - ・施設、地域の方々にネパールの餃子のことを『美味しい、もっと買って食べたい』と言ってもらえたので、時間がある時に沢山作って、また提供(販売)したいと思います
- 10月には、ネパールで一番盛り上がるダサイというお祭りを一緒に楽しみながら、秋祭りに野菜を販売したりなども考えています。また、今後は無人販売の小屋を作って地域の方にも提供していきたいと思っています。(参考・文献など)

大和橘を使ったお香作り

◆キーワード

- 1 就労支援
- 2 大和橘
- 3 アクティビティ

アクティビティから有償就労への可能性についての模索

奈良県・奈良市

グループホーム ことのいえ 古都の家 学園前

発表者： 片桐 藍

共同研究者： 野網 富希子

平成 16 年 9 月開設。2 ユニット 18 名のグループホームです。地域に根ざした施設を目指し、施設職員が自治会や地域のお祭りの役員も担っています。

地域活動が盛んな地域に所在しており、「地域ネットワークの中で認知症の人の尊厳を守り、認知症の人の主体性を中心とした支援活動を行います」を理念の一つとしています。

（取り組んだ課題・はじめに）

グループホームの毎日の中で、入居者の方が時間を持て余す場面をよく見る。食事作り、洗濯、掃除などだけでは物足りず、工作などのアクティビティを実施しようにも、「幼稚園や」と一蹴されることもある。

さて、当施設は奈良県奈良市にある追分梅林の再生事業に携わった「若年認知症サポートセンターきずなや（以下きずなや）」と繋がりがあある。追分梅林では日本古来の柑橘である大和橘の栽培を行っている。大和橘は抗酸化成分ノビレチン及びタンゲレチンがなど多く含まれており、認知症予防の観点から今注目が集まっている植物である。

追分梅林では「きずなや」をはじめ、多職種、多事業所が集まり、若年性認知症の方やひきこもりの方が大和橘の栽培や収穫を担う就労支援を展開している。以前からグループホーム入居者の余暇活動としてのアクティビティについて相談していた縁もあり、摘んだ後の大和橘の実の加工に協力を依頼したい、と提案があった。グループホームで出来ることや、作業の工夫、また大和橘がもたらす心身への効果についても着目してみた。そして、作業をしていく中で、グループホーム入居者が働いて収入を得ていく就労支援について可能性を感じた。就労支援の方法についての模索も重要なテーマの一つとする。

（倫理的配慮）

今回の発表にあたり、ご本人とご家族には、取り組みの目的及び方法についての説明を行い、了承を得た。また、個人情報の掲載については個人が特定されないように配慮を行っている。

（具体的な取り組み）

グループホーム入居者と共に、依頼のあった大和橘を剥く作業を実施。また、剥いた皮を利用した加工品の開発を行う。その一連の作業をグループホーム入居者が担うことによる様々な心身の効果について、評価スケール(BPSD25Q)を用いて判定を実施した。実施したのは比較的認知症の軽度な方が多い 2 階フ

ロア入居者 9 名。

試行の末、大和橘を粉末にしてお香を作ることに成功した。入居者に大和橘を剥く作業、皮と実を分ける作業、皮を乾燥させて粉末にする作業、粉末にした大和橘を使用してお香を作る作業など、それぞれの過程で作業を担っていただき（タスクの細分化）、商品化していく。

（活動の成果と評価）

参加できる入居者それぞれにおいて、その方の認知力や性格の傾向に合わせた作業を分配することに試行錯誤した。

作業前と作業後において、評価スケールを比較したが、評価スケール上は明確な改善や向上は見られず、大和橘の心身への効能は短期的には表れなかった。しかしながら、特定の入居者の方には、作業があることで役割を感じたり、時間を持て余す場面が減ってきたという有用な効果が表れた。

効果が見られた特定の入居者の方に絞り、継続的にお香作りの作業時間を設けていく。厚労省通知を読み込んだ上で、出来上がった商品を「きずなや」と連携して販売することで、グループホーム入居者の就労支援へと繋げるための取り掛かりとし、現在も取り組みを継続している。

（今後の課題・考察・まとめ）

生の橘を取り扱える季節が限られているため、季節外において加工品の作成をすることで年間を通じて作業することができ、入居者の役割創造や生活の意欲向上につなげることができていることが分かった。

制度上、収益を得るのは難しく、有償ボランティアまでが現状の限界だが、成果を形にして還元する方法を探った。今後はグループホームで暮らしながらも、地域と繋がり「自分の役割がある」生活を目指していけるように実践を続けていきたい。

（参考・文献など）

- ・介護保険最新情報 Vol.1302
- ・橘の機能性成分の調査研究（第 1～3 報）

緊急の緊急！ショートステイ

◆キーワード

- 1 緊急ショートステイ
- 2 GH 職員の力
- 3 地域貢献

介護の工夫ありき

ゆびてる さんだ

兵庫県・三田市

施設名 グループホーム ユピテル三田

発表者：介護福祉士 奥野 ひろこ 奥野 広子

共同研究者：田辺 ともこ みしま りえ 田辺 智子 三島 理恵

平成 15 年 8 月開設 3 ユニット定員 27 名

グループホームの他共用型デイサービス・共用型・緊急ショートステイ開設、他三田市認知症高齢者等緊急ショートステイ事業を受託

(取り組んだ課題・はじめに)

ユピテル三田では平成 30 年より緊急ショートステイを開始して以来、急なサービス依頼に柔軟に対応してきた。ご自宅での対応に苦慮し疲弊している家族に寄り添い、認知症高齢者が在宅生活を継続できるよう支援してきた。また、三田市認知症高齢者等緊急ショートステイ事業を受託しており、市内に在住する認知症及び認知症の疑いのある高齢者で介護保険を申請していない方に対し 7 日以内の緊急ショートステイを実施している。これらの取り組みは地域貢献へと繋がっていると考えており、その内容について報告する。

(倫理的配慮)

本発表では、個人が特定できないように倫理的配慮をしている。

(緊急ショートステイの利用状況)

令和 6 年 4 月～令和 7 年 3 月までの 1 年間の利用人数は延べ 1053 人。3 ユニットのグループホームで 1 日 3 名の利用が可能であり、緊急ショートステイだけの稼働率は 96.16%。利用日が重なり受け入れ出来ない日も時々ある。利用者の介護度別人数は、要介護 1 は 66 人、要介護 2 は 62 人、要介護 3 は 660 人、要介護 4 は 168 人、要介護 5 は 97 人。中等度以上のニーズが高い傾向である。

(事例紹介)

事例①92 歳、要介護 4、男性。妻と 2 人暮らし。他デイサービスを週 2 回利用しているが、朝の送り出し準備に妻が苦労している。入浴は拒否にて月に 1 回程度。自宅で尿失禁後、更衣介助をしようとした妻を突き飛ばし、妻が腰部打撲。痛みが強いことから自宅での介護が困難となり、緊急ショートステイ利用。開始時排泄や入浴は拒否していたが、嫌がる時にはすぐに対応を中止し、次に歩き始めたタイミングで「こちらにどうぞ」と必要最小限の言葉でトイレに案内すると上手くいくことが分かる。ショートステイ終了時には家族に対応のコツを伝え、自

宅での介助の参考にしてもらおう。トイレの介入に成功すると入浴への介入にも抵抗なく応じてくれ、妻も当事業所に任せることができると安心された。

事例②92 歳、要介護 3、男性。妻と 2 人暮らし。他デイサービスを週 2 回利用しているが、気分が乗らないと暴力的。排泄や入浴の介入は困難であり、他デイからは利用継続が難しいと言われていた。また他ショートステイ利用は断られていた。妻が介助中に急性腰痛となり、緊急ショートステイ利用。利用時は送迎の車から降りず、降りても GH に入らず、排泄・入浴介入も拒否。放尿、ベッドで寝ずにソファで就寝等が認められた。本人が嫌がる時は寄り添う姿勢で過ごし、徐々に本人の態度は軟化した。レクリエーションでは発言をせず、直接的参加はしないが、その近くで過ごすことで表情が和らぎ、ケアがスムーズになった。緊急ショートステイで穏やかに過ごす自宅でも落ち着いて過ごせるようになっていき、現在も在宅生活が継続出来ている。

事例③75 歳、介護認定無し、男性。娘と 2 人暮らし。本人は自宅の鍵を所持せず、早朝から家を出される。20 時頃まで娘は外出予定で本人も理解していた。しかし道路で転倒し、救急隊や警察に通報があり、擦過傷等の処置後、市から緊急ショートステイ利用の依頼がある。到着時、強い尿臭があり、すぐに入浴。記憶が保たれている部分と曖昧な部分があったが、本人より半年ぶりに入浴したと聞き取る。2 泊 3 日後、市の職員と帰宅。

(今後の課題・考察・まとめ)

自宅で認知症ケアに難渋するような方にも対応に慣れたグループホームスタッフは工夫をしながら 1 人 1 人の状況にあったケアが出来る。また、グループホームの生活感溢れる和やかな雰囲気でも過ごすことも好循環を生む要因となり、緊急ショートステイのニーズへと繋がっている。住み慣れた地域で過ごすことに貢献できていると考える。

地域課題からの活動づくり

◆キーワード

- 1 認証カフェ
- 2 地域課題
- 3 地域貢献

広島県・府中町

ふちゅう えん ち え り ゑ ゑ ど あおさきひがし おおす
府中みどり園・チェリーゴード・ふれあい青崎 東・ふれあい大須
(府中町 GH 連絡会)

発表者：管理者 伊名波 宗一郎

共同研究者：チェリーゴード 山廣綾・ふれあい青崎東
二井林 恵理・ふれあい大須 橋本栄作
府中みどり園 小代桜

府中町 GH 連絡会は平成 24 年に府中町のグループホーム 4 つが自主的に作った連絡会。地域に認知症ケアや介護について広める活動をしている。

在宅で介護をされている方や認知症ケアに悩んでいる方が気軽に立ち寄れて話しを聞いてもらえる場所づくりに取り組んでいる。

(取り組んだ課題・はじめに)

府中町グループホーム連絡会は平成 24 年にグループホームの管理者で立ち上げ、その後 13 年間活動を続けてきた。その間、コロナがあり、3 年ほど活発に活動出来ない時期もオンライン上でお互いを励まし、令和 5 年に活動再開した。コロナ前に行っていた活動も復活し、今年度は 4 つのグループホームがひとつの祭りを企画して、利用者同士の交流も行い、さらに絆を深めた。また、府中町グループホーム連絡会として、府中町の社会福祉協議会が行う『地域座談会』への参加、府中町のチームオレンジが行う勉強会への参加を通して地域課題に対して取り組むことも行ってきた。

(倫理的配慮)

今回の発表の中で登場する社会福祉協議会の取り組み、府中町役場の行っている内容については、予めどちらにも連絡し、許可を得て発表している。

(具体的な取り組み)

府中町社会福祉協議会が昨年から実施している地域の座談会へグループホーム連絡会も参加した。社会福祉協議会が行うこの座談会は町内をいくつかの区域に分けて、それぞれの地域で開催し、その地域の生活課題、それに対しての解決策の提案、検討などを行っている。

何度か回を重ねるうちに、ある地域で「認知症カフェのような、その地域で介護をしている人などが集う場所が少ない」という課題があがった。府中町グループホーム連絡会では、平成 26 年より認知症カフェ椿を開催してきた。確かに開催地域の在宅介護をされている方や地域の方には親しまれているものの、その地域課題があがった地域ではこのようなカフェの開催をしては来なかった。

連絡会メンバーで話し合いを重ね、『出張カフェ』をまずは 1 回開催してみようということになり、場所や周知、使用する物品や内容などいくつかのことを

話しあった。

(活動の成果と評価)

地域課題として挙げたことから開催した『出張カフェ』は、周知をしたものの、その地域の多くの方の参加は得られなかった。それは、同じ地域であっても、座談会を行った場所から少し離れた交流センターで開催したという場所の問題もあった。ただ、参加された方が偶然、何十年かぶりに出会うという想定しなかった再会の場面もあった。

また、地域の課題に対して 1 度取り組んだだけで、そのことを座談会の席で再度話し合うことはしていないため、今後、継続を考える時にまだまだ準備出来ることや検証していかないといけないことは沢山ある。

(今後の課題・考察・まとめ)

認知症カフェは府中町には現在、グループホーム連絡会が行っているこのカフェだけになっている。今回『出張カフェ』を行った地域以外にも、このような場を必要な地域があるかもしれないと考え、座談会のような場所を利用しながら、連絡会として地域の課題に取り組むことは今後ますます必要になると思われる。また、府中町のチームオレンジが行う勉強会の講師として連絡会メンバーが参加することでそこから地域の課題が見えてくる。さらに今年度末には『介護の魅力発信プロジェクト』として府中町が行うイベントにグループホーム連絡会も他団体と一緒に参加することになっている。様々な活動に連絡会として参加することにより、見えてくる地域課題に取り組み、グループホーム連絡会だから出来る取り組みを今後も模索していき、地域づくりに貢献していきたい。

グループホームから共生社会をめざす

◆キーワード

- 1 共生社会
- 2 認知症カフェ
- 3 チームオレンジ

地域の「嫌われ施設」から生まれ変わったももか

兵庫県・太子町

ぐるーぷほーむ

そらすと

ももか たいし

グループホーム ソラストももか太子

うえの みえこ

発表者：施設ケアマネ・上埜 美恵子

よしだ あきお

共同研究者：吉田 亮夫

閑静な住宅街にある2ユニットのグループホーム

日中は玄関を施錠していないなど、ご利用者の生活の流れを止めないサービスを提供している。また元ノラ猫、現副施設長の「モモ」もご利用者と共に生活している。

（取り組んだ課題・はじめに）

1 5年前の自施設（ももか）は、近隣住民だけでなく居宅のケアマネからも包括支援センターからも疎まれた存在でした。理由は、地域共生を全く意識せず施設の理念を誤って解釈し周囲へ押し付けたことが原因でした。その結果、施設だけでなくご利用者も孤立させることになりました。この失敗を反省し、私たちは認知症ケアを学び直すことで理念を紐解き、地域と共にご利用者がいきる道を模索し続けることで、本当の意味での「地域共生社会」の実現を目指することができました。現在は自施設から地域に向けて様々な活動を広げること目標に取り組んでいます。

（倫理的配慮）

自施設スタッフ・関係者に、日本認知症グループホーム全国大会の演題に取り組むことを伝えました。また、主旨及び実践内容を説明し協力を依頼すると共に、個人情報の取り扱いにも十分注意する旨も伝え同意を得ています。

（具体的な取り組み）

1. 「ももか便り」を作成しご家族や各関係施設、地域の回覧板で配布し、施設内での取り組みを知ってもらう機会を設けました。
2. 積極的に法廷研修を受講する等、施設内外を問わず適切な研修を受ける機会を多く設け、認知症ケアを学び直しました。
3. 全職員が認知症サポーター養成研修を受講した後、3名をキャラバンメイトとして排出、うち1名は町のチームオレンジのメンバーおよび県のオレンジチューターとして活躍する等、施設内から施設外へ発信するツールを確立しました。
4. 2025年4月からは「認知症基本法」の概念に則った町内初の「認知症カフェ」を月に1回、チームオレンジのメンバーや町内外の専門職と共に開催しています。
5. チームオレンジの活動の場を広げ、グループホームや認知症への理解をさらに深めるための活動を模索中です。

（活動の成果と評価）

毎月「ももか便り」を作成することを13年続けています。当初は営業に行っても名刺も取ってもらえない状態を打破するために始めた苦肉の策でしたが、今では楽しみにして下さる方も多く、便りを見れば提供しているサービスが一目瞭然分かったといった点も好評です。

また、法定研修で認知症ケアを正しく学び直すことでパーソンセンタードケアといった概念を知り、それまで行っていた職員ファーストから利用者ファーストのケアを改めることに繋がりました。職員間で理念の方向性を共有した結果、関係性が良くなり離職者が減少するといった効果も得ています。

施設がうまく循環することで、次第に地域にも目を向けることができるようになりました。自施設職員に向けて、いつでも研修を実施できるよう受講したキャラバンメイト研修でしたが、地域の小学校や中学校からキッズサポーター研修の要請を受け、チームオレンジの一員になって地域の問題に向き合うにつれ、もっと地域に対して貢献できることはないかと意識するようになりました。

そんな時に町内で認知症カフェを立ち上げる話があり、せっかく立ち上げるのであれば認知症カフェをうたった既存の「サロン」ではなく、きちんと認知症カフェの概念をおさえた居場所づくりがしたいと認知症カフェモデレーター研修にも参加しました。まだ3回の開催ですが、一定数の認知症当事者の訪問が見込めており、好評な感想を頂いています。私たちがいつか認知症になっても、安心して認知症になれる共生社会を目指すために、職員一同これからも精一杯取り組んでいきたいと思っています。

（今後の課題・考察・まとめ）

- ・認知症がある人の社会参加の拡大を図る
- ・チームオレンジのメンバーの増員を期待する（参考・文献など）
- ・認知症の人とともに歩むグループホームケアの理念と実践
- ・実践パーソン・センタード・ケア
- ・共生社会をつくる認知症カフェ企画・運営マニュアル

いつでも好きに使ったらええんじゃけえ

◆キーワード

- 1 地域交流
- 2 地域連携
- 3 地域活性化

地域に見守られて 人と人を紡ぐ



広島県広島市

せんだう
グループホーム千同ひまわり

【GH千同】

さない はるよ
発表者：讃井 晴代あきやす ともはる
共同研究者：秋保 友治

医療法人みやうちグループ6つ目のグループホームとして、2012年4月1日に開設
木造2階建て 定員18名

広島市佐伯区のだかな場所に立地
入居者様、ご家族様が「ここに入居して良かった。」と
えるホーム作りに取り組んでいます。

(取り組んだ課題・はじめに)

ホームの前には、大家であるK様宅があり、つつじの咲く頃には、自由にお庭に入らせてもらうなど楽しませてもらっている。また、近隣には、保育園があり、芋ほりや運動会に招待していただくなど交流がある。

開設当初より、大家のK様をはじめ、地域の方とのつながりがある環境であったが、コロナ禍の為、外部との交流がなくなり、その差異に社会や人とのつながりの大切さ、ありがたみを改めて実感している。そして今、コロナ禍以前よりも地域・社会との関わりが活発になっていきそうな様子や今後の展望を発表する。

(倫理的配慮)

関係者には、発表することの説明をおこない、写真の掲載についても同意を得た。法人の倫理委員会にて承認を受けた。

(具体的な取り組み)

K様の敷地内には、地域の方に開放されているスペースがあり、気軽に集まれる場所になっている。カラオケ設備が整っており、壁には、カープグッズなどが飾られて、カープ女子の入居者様の散歩帰りに立ち寄り、楽しませてもらっている。この場所で同法人の他のグループホームをお誘いし、一緒にカラオケを楽しませてもらったり、また、地域の方とお釜で炊き込みご飯や豚汁を作り、皆さんとランチをする機会を持ち、楽しく過ごさせてもらった。そして、他のグループホームのイベントにも参加し、相互の交流も生まれてきている。運営推進会議では、他グループホームの参加があり、そのグループホームが開催している地域イベント【自由区】の話があった。地域の方が非常に興味を持たれ、「千同自由区」開催の運びとなった。地域の方の出店やステージも企画された。地域の方の宣伝もあり、大盛況で地域の絆の強さを感じることができた。

また、当ホームも町内会に加入しており、町内の行事にも参加させてもらっている。2025年新年には、コロナ禍以降、初めて、町内の新年会に職員が参加した。そして、夏祭りの際は町内の一員として職員

が、焼きそば作り、舞台ではダンスや演奏で出演させてもらい、喜んでいただき、より一層地域の方との関係が深まったように感じられた。

(活動の成果と評価)

地域の方がとにかく様々なことに積極的に関わってくださり、運営推進会議などで、何かを話す度に、次に何をするかという流れが実感できる。それは、やらないといけないという思いからではなく、楽しいことをみんなでやろうという思いであることが、地域の方のきらきらした笑顔からも感じられ、それに私たちが引っ張ってもらっていると感じる。入居者様やご家族様はもちろん職員も地域の方から元気をもらっている。地域イベント「千同自由区」は、職員の人員的にみんなが思い描いているイベントができるか不安も大きかったが、実際は、地域の方が率先して協力してくださり、私たちは全面的に入居者様に関わることができ、楽しむことができた。そのような心強い地域の方と共に、入居者様やご家族様を支えていると感じている。また、地域の方からは、「車椅子を貸して欲しい。」と要請があったり、ちょっと困ったことがあれば気軽に声をかけてもらっている。顔が見える関係を作ること、お互いが支え合える関係ができていると感じている。

(今後の課題・考察・まとめ)

日々の業務に加え、イベントを開催したり、参加することは職員にとっては負担に思えることでもあり、職員間でもいろいろな思いや温度差がある様子もみられる。そこをどう捉えて今後のことを考えていくかは課題である。また町内会やこども会などの時代と共に変化している地域の活動の状況も気になるところであり、課題になってくると考えられる。今の状況ができてるのは、行事や運営推進会議など何かある時に声をかけるだけでなく、日頃からの何気ない関わりを通じて「グループホーム千同ひまわり」が地域の住民の一員として日々過ごさせて貰っていることが大きいと感じている。とはいえ、まだできること、やりたいことがたくさんある状況であるので、地域の方の思いを共有しながら形にしていきたいと考える。

共用デイとショートステイを経験して

◆キーワード

1
2
3

入所までにつながった例

佐賀県・有田町

株式会社 ケアフル・ケア グループホーム せせらぎ

やまなか とおる

発表者：山中 徹

認知症対応型共同生活介護 2ユニット 18名
認知症通所介護佐賀県有田町にあり、自然豊かな所に施設があり基本理念
5つのならばを元に利用者様によりそったケアを行って
おります。

(取り組んだ課題・はじめに)

グループホームせせらぎは今年4月より認知(共用)
デイを開始しました。その中の利用者様が認知症の
進行により自宅での介護が困難になってこれらグル
ープホーム入所までの過程を発表をいたします。

(倫理的配慮)

今回の発表に対して家族様に了承を頂きました。個
人の特定に繋がる名前、写真等は伏せさせて頂いま
す。

(具体的な取り組み)

A氏 女性 要介護

アルツハイマー型認知症 レビー小体型認知症

ご主人、息子様家族と同居

認知デイには5月より利用開始される(その前は別
デイサービス利用されていた)ケアマネージャー、家族様の事前の打ち合わせより
本人様の行動に対して悩まれていた。

<家族様が悩まれていたこと>

幻覚、幻視が顕著にあられ一人言を言いながら一人
なのに会話され歩かれる。鏡を見て会話される。雨
が降っていても窓を開けそこに居らずと言われ会話
される。またトイレによく行かれ汚染が多いがこち
らが言っていることが理解できず時間がかかる、そ
れに伴って本人様も混乱され歩き周られたりイライ
ラされるなど悪循環になっておられた。

<認知デイでの生活>

ケアマネージャーと相談の元A氏がお世話好き、音
楽(体操)好きなので掃除、テーブル拭き等お願い
したりした。音楽(体操)の時間の確保、また他利
用者様に声掛けられることもあるのでスタッフが間
に入って対応していた。ショートステイを1泊2日
を利用するなどして泊まる環境にも少しづつ慣れて
もらっていた。

<入所までの経緯>

家族様は仕事しながら見ておられたが目を離した時

にレンジで物を真っ黒下にされたり外に出られたり
と肉知的・精神的にも疲労困憊になってきておられ
かかりつけの先生と相談され入院、治療の検討され
ていた。ケアマネージャーより報告がありこちらよ
り薬物療法して自宅に戻られるより当施設に入所さ
れありのままの本人様が生活できるように環境を整
えた方がいいのではないかと提案しました。家族様
も悩みに悩まれ家族様で話され何度も聞きにこれれ
ましたが最終的に入所の運びとなりました。

(活動の成果と評価)

本人様と家族様がお互いに疲労困憊になっておられ
たのでケアマネージャー、施設が間に入り環境を変
えることで心の安定に繋がり、A氏も慣れた環境の
まま入所することで安心した生活ができています。環
境が変わることで面会時も気軽に挨拶されていたの
が印象的だった。

(今後の課題・考察・まとめ)

本人様のBPSDは環境・人など様々な要因で起こ
りえることで何故そのような行動されるのか深掘り
し原因を改善してあげることで本人様だけではなく
家族様も安心した生活ができるのではと考えられる。
入所したからゴールではなくスタートラインに立っ
ただけであり入所した後の生活のケア、家族様との
連携も大切になってくる。

(参考・文献など)

ともにつくる作品展 ～私たちの希望宣言～

◆キーワード

- 1 新しい認知症観
- 2 学福連携
- 3 認知症チームケア

地元小学校との相互開催から導く地域共生の実践

新潟県・長岡市

グループホームわしま

やこ みき

発表者：計画作成者 八子 美紀

こばやし くみ

共同研究者：計画作成者 小林 久美

平成 27 年 4 月、長岡市和島地域（和島村）に地域密着型特別養護老人ホームに併設し、2 ユニット／定員 18 名で開設、今年は 10 周年の節目の年を迎えた

「和島地域を共生のまちへ」を掲げ、花壇づくりを起点に共生社会の実現に向けて取り組んできた実績が評価され、功労者国土交通大臣表彰を受賞（令和 7 年 6 月）

（取り組んだ課題・はじめに）

私たちはこれまで「ともにつくるおこめ」（令和 4 年～）で認知症ケアと職場のエンゲージメントに、「ともにつくるやさい」（令和 5 年～）で認知症高齢者の社会参加活動に取り組み、認知症ケアの実践に挑戦し続けてきた。施設を挙げて推進した「ともにつくるかだん」では共生社会の実現に向けた諸活動が評価され、地域とともにあゆむグループホームとして培ってきた実践を地域に還元したいと考えた。

そこで、令和 7 年はこれらの取り組みの原点となった「ともにつくる作品展」（令和 2 年～6 年目）をグレードアップさせた取り組みを実践していくこととした。開設以来 10 年にわたって交流を重ねてきた地元小学校と協働し、同じ地域で暮らす児童と利用者、教職員と職員、学校と施設を結びつけ、相互開催による作品展を展開し、認知症基本法の理念とともに「新しい認知症観」への理解を体験的に広めていく地域共生のプログラムを立ち上げた。

（倫理的配慮）

演題発表にあたり、取り組みの趣旨や成果を利用者、家族および関係者に説明し、了承を得た。

（具体的な取り組み）

プログラムを始めるにあたり、小学校の校長先生らと施設でオリエンテーションを行った。さらに多様な主体との連携を図ろうと、長岡市と地域包括支援センターから保健師を含む認知症地域支援推進員を招き「サポートミーティング」を開催した。

これまで毎年続けてきた地域を巡る作品展は今年も例年通り秋以降に開催することとし、新たに相互開催する作品展は夏休み前後に計画した。利用者の作品を展示する小学校での開催は夏休み前に、児童の作品を展示する施設での開催は夏休み後に予定し、思いを込めた作品づくりや期待に繋がる展示方法について、互いに検討を重ねていくこととなった。

さらに、プログラムを本人視点でより実践的に展開していくために認知症チームケアの取り組みを取り入れた。認知症チームケア推進研修の受講とともに体制づくりを行い、対象となる利用者を決め、7 月より PDCA サイクルを進めていくこととした。

（活動の成果と評価）

オリエンテーションではプログラムの趣旨や目的を説明し、制作方針や展示環境について意見を交わした。「サポートミーティング」では地域を支援する立場から、認知症を取り巻く社会の変化、認知症基本法や希望宣言、社会参加、意思決定等について講義を受け、利用者を地域とともに支援していく視点を学んでプログラムの展開に動機と自信を得た。

すでに定着した作品づくりでは工夫や達成感など利用者同士や職員との間に共感が生まれた。7 月の小学校での開催では利用者と職員が協力して展示を行い「ともにつくる作品展」を開催し、夏休み後に予定する施設での開催に繋がるものとなった。

認知症チームケアの取り組みでは実践担当者を中心にチームを組織し、カンファレンスを開催して BPSD の評価指標（BPSD25Q）を用いた評価を行い、立案したケア計画等をワークシートにまとめた。利用者が作品展に関わっていく過程を BPSD を軽減していく過程に重ね合わせて展開していくことで、その人らしい暮らしを本人視点で理解することができた。

（今後の課題・考察・まとめ）

本プログラムには社会参加活動や意思決定支援の要素を織り込んでいる。相互開催とした作品展では互いに「自分の作品を観てもらう」といった期待の中で営まれる、思いを込めた作品づくりに互いの未来を分かち合う姿を感じることができた。それらは互いを認め合い、自ら地域と繋がっていく道標となり、子どもたちも高齢者も、認知症であってもなくとも、未来に向かう希望を育み、共生社会の実現を照らす一灯となるに違いない。地元小学校との学福連携では作品展の相互開催という共通の実践を、同じ地域、同じ時間、同じ思いを分かち合う体験的な手法によって「新しい認知症観」を得ていくだろう。

私たちは地域ならではの地域共生を実践し、一人ひとりが希望を持って暮らし続けられる社会を地域とともにつくっていくことをここに宣言したい。

（参考・文献など）

『ソーシャルデザイン』朝日出版社（平成 24 年）

『問いかけるアート』さわらび舎（平成 29 年）

みんなでやろう！結カフェ

◆キーワード

- 1 地域交流
- 2 認知症カフェ
- 3 出来る事、得意な事

利用者様主体で行うカフェ開催の取り組み

かかみがはら

岐阜県・各務原市

グループホーム ジョイフル各務原

かいごしょく いまい まゆ

発表者：介護職・今井 麻裕

しょくいんいちどう

共同研究者：グループホーム職員一同

自然と町の調和がとれた地域の中で安心とくつろぎを提供。特別養護老人ホーム、デイサービス、居宅支援事業所など事業所を併設している。

1 ユニット 9 名の事業所、設立は平成 15 年

(取り組んだ課題・はじめに)

- ・コロナ過でボランティア等の地域の方が来設される機会が減っていた。利用者様：「もっと子供たちや地域の方と関わりたい」、ご家族：「地域の方と関わって欲しい」という声が挙がっていた。
- ・[日常で行っている事を活かして皆でカフェを行い、地域の方や子供たちを招いておもてなしを試みるのはどうか]と職員から利用者様に提案した。
- ・職員の提案に興味を持った利用者様複数から認知症カフェをやる事を前提とした具体的なアイデアが挙がった。
- ・利用者様と職員で相談を重ね、利用者様主体で行うカフェを 2025 年 1 月から月 1 回のペースで始めた。

(倫理的配慮)

- ・今回取り組みを行うにあたり、利用者様とご家族に説明を行い同意を得た。また、全国グループホーム大会へ参加するため、写真や記録なども使用させて頂きたい旨を説明し、承諾を頂いた。

(具体的な取り組み)

- ・過去の生活歴を確認し、ご家族にも得意だった事の聞き取りを行い、情報収集を行った。
- ・ADL 等やご本人の性格、普段の様子等も含めた役割確認表を作成し、職員全員で状態確認を実施した。
- ・カフェのコンセプトは、【新しい縁を結んでいけたら。結んだ縁を活かし、よりよい関係を維持していけたら】と願い、全員で「結カフェ」と名付けた。
- ・結カフェの看板や食器、コースターを手作りました。
- ・グループホーム職員、利用者様で他事業所の認知症カフェに参加した。
- ・得られた情報を基に当日の役割の割り振りや流れを職員全員で検討し、仮決定した。決定後にユニット内で動作が可能かどうかの確認を実施し、随時変更した。
- ・開催前からポスターを掲示し、利用者様や来設者、

ご家族に周知した。

- ・月に 1 回、グループホーム内や同敷地内の地域交流室や喫茶スペースを使い、結カフェを実施した。
- ・開催後に参加者から感想や改善点の聞き取りを行い、随時追加変更を行った。

(活動の成果と評価)

- ・初めは職員からの促しがないと動く事ができず、戸惑いの声も多かったが、少しずつ作業に慣れゆとりを持てるようになった。利用者様から積極的に動こうとする姿や次回を楽しみにする姿が見られるようになってきた。
- ・ご家族から結カフェに関する問い合わせが複数あり、グループホームの取り組みに興味を持って頂けただけでなく、満足度向上に繋がった。
- ・他事業所職員や地域の方（民生委員）からは、応援の声を頂けている。
- ・結カフェ来設者状況
1 月 6 日：居宅支援事業所職員 2 名、
2 月 27 日：地域包括支援センター職員 2 名
居宅支援事業所職員 1 名
特別養護老人ホーム職員 1 名
4 月 22 日：特別養護老人ホーム職員 2 名
5 月 18 日：民生委員 1 名、家族 4 名
- ・他事業所職員と話す機会が増えた。グループホームの活動の周知に繋がり、取り組みの問い合わせが増えた。

(今後の課題・考察・まとめ)

- ・認知症の影響もあり、集中して作業に取り組む事が難しい方が複数おられ、毎回利用者様の状態や行動・反応が違い、いつも手探り状態が続いている。
- ・利用者様同士や来設者と利用者様の会話が続かない時も多く、様子を見ながら職員が会話のきっかけ提供や雰囲気作りをする必要がある。
- ・今後も継続し、活動の定着を目指す。
- ・最終的には、相談スペースの設置等を行い、伴走型支援に近い形で行っていきたいと考えている。

繋がり

◆キーワード

- 1 共用デイ
- 2 地域拠点
- 3 認知症カフェ

思い出に染まった場所

東京都・八王子

にんちしょうたいおうがたきょうどうせいかつかいご ぐるーぷほーむ じゅげむ
 認知症対応型共同生活介護 グループホーム 寿限無

かいごふくしし こじま ゆうさく
 発表者：介護福祉士 児島 勇作

医療法人が運営しているグループホーム。同法人のクリニックとの医療連携が強みである。

平成 21 年 2 月 1 日に開設。2 ユニット 18 名の方が生活されている。平成 31 年 4 月に 1 ユニットで共用型デイサービスを開始、令和 5 年 11 月より、2 ユニットで共用型デイサービスを提供している。

(取り組んだ課題・はじめに)

高齢化と認知症高齢者の増加に伴い、在宅支援の充実と地域社会との連携の重要性が増しています。寿限無では、認知症対応型の共用型デイサービスを 2 つのユニットで運営しています。平成 31 年に片方のユニットで開設し、それに続き令和 5 年にもう 1 つのユニットで開設しました。同法人の医療機関との連携を強みとし、グループホームの特徴を活かし、認知症に特化したサービスを提供できるよう力を入れています。多面的な活動と地域の方々の参加を促進し、ご入居者様やご利用者様の QOL 向上と、地域社会に根ざした支援網の構築を目指す為、特に「やりがい」の創出や、「つながりの持続」、そして「多様な暮らし方の選択肢」の提供に力を入れており、演題のテーマとしました。

(倫理的配慮)

ご入居者様、ご利用者様、ご家族様、並びに施設職員に取り組みの概要をご説明し同意を得ています。併せて写真使用等の承諾も頂いています。

(具体的な取り組み)

やりがいの強化の為、ご本人様の個性や趣味に即したプログラムを提供し、グループホームの特徴である職員と共に調理を行う事や、縫い物や編み物の創作活動、体操、散歩やドライブなど、自己効力感を高める事で、認知機能の維持と精神的な充実を図り、また、ご家族様も参加可能なイベントを開催する事で、ご家族様にも寿限無との繋がりを感じて頂けるよう取り組んでいます。

地域との繋がりを意識し、地域の自治会や学校・保育園などと連携し、地域交流イベントへの参加や、地域住民も交え寿限無内にて開催している「地域カフェ」等を通して、交流の場を拡大しています。入居への選択肢として考えて頂けるよう、看取り介護にも力を入れており、ご希望される方は最期まで寿限無で過ごせるよう環境を整える事で、認知症対応型共用型デイサービスを、在宅支援だけではなく、

住み慣れた地域で生活しながら地域との交流を継続し、多様な暮らしを送る為の 1 つの選択肢として選んで頂けるよう努めています。

(活動の成果と評価)

ご本人様の主体性が顕著に引き出され、積極的な姿勢を持って頂く事ができるようになりました。ご本人様の意欲や趣味を尊重した支援は心身の健康維持にとどまらず、精神的な側面でも大きな効果をもたらし、表情が硬く大声を出されて落ち着きがなかった方が穏やかになられる様子も見受けられました。地域活動が増えた事で、地域との交流や活動を維持し、ご利用者様自身が社会の一員として繋がりを深める事ができ、孤立や不安軽減に繋がっています。更に、多世代の交流やご家族様が参加できるイベントを行う事で、寿限無とご家族様との繋がりも深くなりました。2 つのユニットの運営を通じてご利用者様の生きがいや活動意欲の向上、ご家族様との信頼を深める事で、ご家族様のレスパイトケアにも繋がり、ご本人様だけでなくご家族様の満足度も高まり、信頼を得る事ができました。

(今後の課題・考察・まとめ)

デイサービスを利用して下さっている方が 6 名とご利用者様が少なく、デイサービスの稼働率が低いのが課題です。認知症対応型共用型デイサービスを認知して頂く為にも、地域との交流を続けていき、八王子唯一の認知症対応型共用型デイサービスとして、認知症の方が自分らしく暮らせる環境を維持し続けられる思い出の場所として、地域のスケールアップを目指していきます。更に、次世代にわたって地域社会が支援の輪を拡大し地域との交流が深まり、繋がりを維持し続けられる、地域の拠点としてのグループホームでいられるよう努めていきたいです。

(参考・文献など)

地域参加への役割

◆キーワード

- 1 活躍の場
- 2 暮らしのいきがい
- 3 地域の資源

地域の人との共生、繋がりを目指す

愛知県・江南市

グループホーム ジョイフル江南

じょいふる こうなん

発表者：介護職 大澤 和美

かいごしょく おおさわ かずみ

共同研究者： 職員一同

しょくいん いちどう

愛知県の北東部に位置し、近くには、一級河川の木曽川が流れ温暖な気候・風土で穏やかに暮らせる最適な環境です。

1ユニット9名、女性9名、平均要介護2.00
職員構成：8名 女性7名 男性1名
平均年齢40代前半

(取り組んだ課題・はじめに)

・(近隣には、高齢者施設や小学校があり、地域における社会生活を送る活動を始めた。)認知症になっても住み慣れた地域で安心した暮らしができるよう、地域での活動を行い共生社会の実現に向け、社会的包摂に繋がる活動を行った。
利用者様のご家族やいきがい、地域資源を活用することで、利用者様が活躍できる場となる取り組みを報告する。

(倫理的配慮)

・研究発表に際し、利用者様・ご家族に組みの趣旨や成果を説明し、了承を得る。

(具体的な取り組み)

・モーニングの開催：愛知県では朝、喫茶店で飲み物を頼むとパンが無料で付くモーニングという地域文化がある。地域文化を生かし、毎月1回利用者様のご家族を招待。利用者様の活躍の場とした。
・作品展示会：社会福祉協議会や市内の老人クラブ主催の作品展に参加。利用者様個々に作品を作成し、展示会へ出品。暮らしの中でのいきがいを見つける。
・交通安全パトロール：近隣の小学校区の安全パトロールを行う。小学生の下校時間にあわせビブスを着用し、旗を広げ、横断歩道前に立ち、安全に横断して頂けるよう支援する。
・地域清掃：施設周辺の範囲で散歩をしながらゴミ拾い等清掃活動。
・防災訓練：市の職員や地域の方々、ご家族と一緒に防災訓練を行う。
・みんなの食堂：開催時に近隣施設にて受付担当を行う。地域のこどもたちや保護者の方と顔を合わせ話しができるよう、配慮頂く。現金を預かり、人数の把握を行う。

(活動の成果と評価)

・モーニングの開催：利用者様個々の能力を活かした、案内・ホール・キッチンと決めて実施した。ご家族がお客様となり、利用者様の様子を見て「以前、母が働いていたことを思い出します」等のお言葉が聞かれた。
・作品展示会：出展に向けていい作品を作ろうと意欲向上がみられ、毎日積極的に取り組んだ。展示会に足を運ぶと同年代の方々と作品について交流する場面がみられた。
・交通安全パトロール：横断歩道を渡るこどもたちが安全に通れるようにしている。「気をつけてね」と声掛けすれば地域の方々より「いつもありがとうございます」「ご苦労様です」と声をかけられ、顔なじみの関係ができてきた。
・防災訓練：市の職員と地域の方、ご家族と一緒に災害時に備え訓練を行っている。
・地域清掃：施設の周りを散歩しながらゴミを拾っている。途中で地域の方と出会い「こんにちは」「ありがとうございます」と挨拶や労いの声を掛けられている。ゴミを拾い、きれいになったことで「やってよかったね」という言葉が聞かれた。
・みんなの食堂：地域の方がお見えになると「こんにちは」と挨拶をしながら「今日は何名」と聞き、人数分の現金を預かっている。参加することで地域のこどもとふれあい、お世話ができることを楽しみにされ、やりがいにつながっている。

(今後の課題・考察・まとめ)

・認知症になっても活躍できる場所、できることがあることをご家族や地域の方に理解を得た。作品作り、趣味活動を通じて、利用者様からのいきがいや意欲を引き出すことができた。
共生社会を体現するには、地域での活躍の場をつくること、考えることが大切である。地域での活動の場を求め、共生社会の実現に向け、今後も活動を行っていく。

(参考・文献など)

なし。

認知症になっても安心な地域づくり

◆キーワード

- 1 認知症カフェ
- 2 地域貢献
- 3 地域作り

～認知症カフェから広がる認知症の正しい理解と繋がり～

岡山県・玉野市

いりょうほうじん

かわぐちいいん

医療法人こまくさ会河口医院グループホームこまくさ

まちば まなぶ

発表者：管理者 町羽 学

たてべ たかし

共同研究者： 建部 貴史

平成 13 年開設。鉄筋 RC 構造の 3F 建て、1F・2F が住居スペース、3F はフリースペースと居宅支援事業所となっている。

平成 27 年 6 月、行政の委託を受けて市内で初となる認知症カフェを開催。認知症の方やそのご家族、一般の方に向けて、正しい認知症の理解をテーマに月 1 回のペースで開催している。これまでに延べ約 1,500 人が参加。認知症に関する正しい理解を広げるとともに、地域の方々が支え合える環境づくりを目指している。

(取り組んだ課題・はじめに)

平成 27 年より始まった認知症カフェ。順調に参加者を増やし地域に受け入れられてきた。しかしコロナ禍では参加者の減少、度重なる開催の中断を受け、今後の方針転換を検討せざるを得ない状況となっていた。そこで令和 4 年に認知症カフェモデレーター研修を受講し認知症カフェが果たす地域での役割について理解を深めた。会場の雰囲気をより重視した運営を行い、正しい認知症の理解をテーマにした地域作りに取り組んだ活動と成果を報告する。

(倫理的配慮)

今回の発表に際し、各関係者に了承を得ている。

(具体的な取り組み)

① ファシリテーターの導入

→講師と会場の参加者を繋ぐ役割を持つ進行役（ファシリテーター）を配置。参加者への配慮と共に議論や質問の活性化を図った。

② ストラクチャーの固定化

→「正しい認知症の理解」を大きなテーマとして設定。参加者・新規参加者を増やすことが目的の内容（クラフトや調理など）は避け、擦り込み型の学習と引継ぎの簡素化を目的に年間計画をある程度の幅の中で固定した。

③ 会場の雰囲気作り

→会場の参加者（当事者を含む）が安心して気軽に交流できるような取り組み。

- ・認知症予防、介護予防についての話はしない
- ・エントリー時間の確保
- ・講義後の振り返り
- ・パワーポイントはなるべく使用しない
- ・BGM は音楽のみ
- ・図書ブースの開設

(活動の成果と評価)

- ① ファシリテーターを配置後、講師と会場がより近くなり、講演中であっても発言や質問が増加した。
- ② テーマと年間計画が固定されているため、常連の参加者は認知症の理解が深まってきている。またモデレーターの交代時にはスムーズに引き継ぐことができた。
- ③ 会場の雰囲気作り
 - ・認知症予防、介護予防の話をしなくなったことで当事者の方が継続して参加してくれるようになった。また予防だけではなく認知症になった後の話ができるようになった。
 - ・参加者同士の交流が活発になり、一般の方と当事者・そのご家族との交流の機会も増えた。

(今後の課題・考察・まとめ)

少しずつではあるが着実に参加者同士で認知症をテーマに気軽に意見交換し、認知症の理解を深めている。また共に学ぶ中で交流の輪が広がることで「正しい認知症の理解」が地域に浸透してゆくのではないかと考える。ただファシリテーターが毎回入ることができなかつたり、年間計画を固定することでテーマに飽きている方もおり、まだまだ課題は多い。これからもその都度見直しを行いながら、認知症になっても安心して過ごせる地域作りに貢献できるよう運営に取り組んでゆきたい。

(参考・文献など)

「よく分かる！地域が広がる認知症カフェ」
認知症介護研究・研修仙台センター

家族と一緒に楽しめるグループホーム生活

◆キーワード

- 1 家族と共に過ごす
- 2 自由な暮らし
- 3 24時間面会

～24時間いつでも来て下さいね～

兵庫県・三田市

ゆび てる さんだ
グループホーム ユピテル三田り うんすく
発表者：李 恩淑たなべ ともこ ぐえん とろん こん
共同研究者：田辺 智子 グエン トロン コン

平成15年8月開設 3ユニット 27名のグループホーム。2線3駅から徒歩3～5分程度の立地にある

認知症デイサービス、緊急ショートステイ、定期巡回随時対応型訪問介護看護等、地域密着型サービスを提供

(取り組んだ課題・はじめに)

直近2年の大会では外国人労働者としての発表を行った。現在も48名の職員中19名の外国人職員が活躍している。多国籍でGH入居者の支援を継続中。兵庫大会では、緊急ショートステイから入居に繋がり、家族との絆を継続或いは深めながら生活している入居者について取り上げる。

(倫理的配慮)

本発表において個人が特定できないように倫理的配慮をしている。

(具体的な取り組み)

現在79歳の男性A様は要介護1で妻と二人暮らし。子はいない。在宅ではデイサービスを利用していた。急に妻が体調不良となり、家事が出来ないとのことで令和6年11月3日に緊急ショートステイを利用。その後、令和6年11月8日に当事業所の部屋が空き入居の運びとなる。当初、徘徊が多く、落ち着かない日が続く。自らトイレに行きたいと発信できず、自室や洗面台で放尿があった。妻が訪問すると表情や態度が引き締まった雰囲気になる。入居以来、妻は夜中を除いていつもグループホームの中で一緒に過ごしている。妻が認定調査員に1日10時間は一緒にいることを伝えると「本当ですか」と驚かれる。

① 昼食又は、夕食なし

日によるが、妻が車で迎えに来て、自宅に行き昼食或いは夕食を食べて戻ってくる毎日。妻も本人も自由な暮らしができ満足している。外で食べない日はお弁当持参で妻が来所。

② 二人で居室で過ごす

外出から戻ると、妻はA様の部屋でゆっくり過ごしている。夫A様の近くで過ごすことでとても安心している様子。一方で社交的なA様は他入居者と交流し多忙な様子。

③ 妻用の布団が運び込まれた

妻がグループホームで過ごす時間が長くなると妻の昼寝場所としてA様の居室に妻用布団が運び込まれた。妻は夫と一緒に昼寝して過ごす日がある。

④ レクリエーションも一緒に

妻は他の入居者と一緒にレクリエーションをするリーダー的立場を担い、職員も助かっている。職員には、「このメンバーだと、〇〇のレクリエーションが向いている」とデイサービスで勤務経験のある妻は協力的に教えてくれることもある。

⑤ 同窓会

A様の高校の同窓会に付き添って欲しいと依頼がある。妻は、排泄の事もあり、ベトナム人介護福祉士の男の子に付いてきて欲しいと希望する。戸惑いながらもベトナム人職員はホテルで開催された同窓会に付き添った。「やさしいから助かったわ。付き添ってくれたら主人と大阪まで外出が出来ることが分かって嬉しい。」と喜んだ。翌日、A様に感想を尋ねると「行っていません。それはあなたが行かれたのではないですか。」と言われ覚えていない。

(活動の成果と評価)

職員は、毎日、様々な時間に来所し、夕方遅くまで過ごす妻に、驚いてもいたし緊張感を持っていた。しかし、徘徊が多く落ち着かなかったA様が穏やかに過ごすようになる様子を見て、毎日のケアの一端になっていると理解する。グループホームはゆったりと自由な暮らし、家庭(家族)と共に生活が出来る場所でもある。ひらかれた日々の中で笑顔が生まれている。事業所は面会時間の設定をしない方針なので、職員が自然に受け入れてくれた結果でもある。

(今後の課題・考察・まとめ)

一緒に過ごす妻からの意見は、運営推進会議で聞く意見と同様に貴重である。家族視点で細やかなので日頃のケアに活かしたい。

一人じゃないを支える共用型デイの力

◆キーワード

- 1 共用デイ
- 2 緊急ショートステイ
- 3 認知症地域拠点

～あいむ共用デイの現在（10年の積み重ねから）～

かぶしきがいしゃ

東京都・新宿区

アライヴ株式会社 グループホームあいむ

あおき ゆか

発表者：介護職・青木 友香

しょくいんいちどう

共同研究者： あいむ職員一同

平成16年10月開設。今年で開設21年目
3ユニット27名。平均年齢84歳、平均介護度2.2
大阪市南部の閑静な住宅街の中ほどにある

グループホーム 基本理念標語
「わたしも みんなも 一緒に楽しい生活」
共同生活の強みを活かした自立支援に取り組んでいる

(取り組んだ課題・はじめに)

平成27年より共用型認知症デイサービスを本格的に取り組んでいます。グループホームで今までに培ってきたノウハウを生かして、在宅の認知症の方々にも役立てればという思いで続けてきました。

その過程での活動内容と、在宅利用者の方に生じた様々な効果を報告させていただきます。

(倫理的配慮)

今回の発表についての資料・写真等は、ご本人・ご家族、その他関係者の了解を得ている

(具体的な取り組み)

- ・在宅利用者の社会的孤立が生む不安感や生きる意欲の低下などを、共用型デイで入居者と共同生活を送ることで軽減し楽しみや生き甲斐を持ってもらう
- ・利用者の思いを知り社会参加的役割を担う

○事例1：近くに息子夫婦が居られるが独居生活。新型コロナの影響で外出や他者との交流の機会がなくなり、認知症状が見られるようになった。孤独感や不安からBPSDが悪化、易怒性や衝動的行動、被害妄想など精神面的の症状が強く見られる。

現在デイサービスを週4回、家族様のレスパイト等でショートステイを月2回程利用している。元々社交的で人当たりも良く、事前にご自宅にてご本人ご家族と合意形成を行っていた。しかし、ショートステイ時に混乱から不穏になり、「こんな聞いている、何でこんな所に居られるの、もう死んだほうがマシやわ」等の発言や、玄関の扉を強く叩かれる。

何を言っても聞いてもらえず落ち着くまでに時間を要することもあった。以降もご本人の状況を見ながら入居者との関係性作りをサポートし、今では馴染みの方と「一人やとろくな事考えへんけど、皆と居るとそんな暇ないからいいわ」との発言や、ショート時も夕食を食べながら、「今日はお泊りみたい。」とご自身から楽しそうに話されている。ご家族の負担も軽減され、このまま出来るだけ在宅で、長く暮らせるようにとのご希望に沿い、支援を続けている。

○事例2：若年性認知症で、ご主人と2人暮らし。認知機能の低下やご主人が認知症についての理解が浅く、喧嘩が絶えないとご家族が困っておられた。

デイサービスの利用を検討するも、ご本人が嫌だと言って話が進まず、連携している地域包括支援センターより相談があり見学を経て利用開始となる。

温厚でお世話好きな性格だと伺っていたため、ご本人には「おばあちゃんたちのお話相手のボランティアに来てほしい」と説明し、利用者間の関係性作りを支援した。

ご自宅ではストレスで過呼吸のような状態になることがあるらしく、あいむでも利用開始時にその状態になった。以降はその日のご本人の状態を見ながら活動して頂き、現在は色々な方々と交流を持たれ、ご自宅以外の居場所と社会参加の場となっている。

(活動の成果と評価)

- ・仲間との共同生活で不安軽減や楽しさを得られた
- ・出来ることあることで自信に繋がり、自宅での活動性も改善し、ご家族から昔の姿を見ているようだと言われた
- ・グループホーム利用者にとっても、友人が訪ねて来てくれた時のような楽しさになっている
- ・ご家族の急な入院やレスパイトなど、空室・緊急ショートステイを併用することで、ご家族の負担が軽減された。その後には入居にも繋がっている
- ・ご入居に至った際は、関係性が出来ているので、ご本人の不安や混乱も少なく、スムーズな対応や共同生活に繋がっている
- ・GH年間稼働率は103%（R6年度）であった

(今後の課題・考察・まとめ)

共用デイを利用し、入居者の方々の共同生活に加わることで、不安感を軽減するだけでなく仲間と共有する楽しさを感じていただき、認知症基本法の理念に沿えるよう、在宅利用者の方々の健康生活に繋がる共用デイを目指します

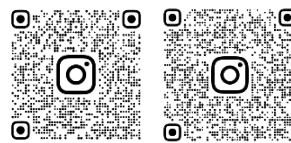
(参考・文献など)「認知症の世界の歩き」ライツ社

三滝自由区へぜひ一度おこしてください！その後

◆キーワード

- 1 地域貢献
- 2 地域連携
- 3 地域拠点

広島県広島市

みたき
グループホーム 三滝ひまわり

【GH 三滝】 【三滝自由区】

たまだ まさゆき
発表者：玉田 将之こうじん みわ
共同研究者： 荒神 美和

医療法人みやうちグループ2つ目のグループホームとして、2002年6月に開設。
木造平屋建て 定員18名。
近隣にて同法人グループが介護老人保健施設、通所リハビリテーション、居宅介護支援事業所、クリニックを運営。

緑と鳥のさえずりに囲まれた、閑静な住宅街に立地しており、入居者様と一緒に元気いっぱいのスタッフとマスコット犬のレオくんで楽しい日常を送っている。
そんな楽しい日常をInstagramにて発信中！

(取り組んだ課題・はじめに)

2022年4月に地域イベントとして生まれた三滝自由区は、飲食、物販、ワークショップといった地域周辺で活躍しておられる方々に、ブース出店を依頼し、地域住民はもちろん、入居者様、家族様、職員も一緒に楽しめる地域イベントとして2ヶ月に1度偶数月の第1日曜日に固定開催している。

誕生して4年目となり、地域との繋がりがこれまで以上に構築され、グループホーム運営にも三滝自由区がプラスの方向へ働いていることを実感している。

課題としていた更に地域へと浸透させて、グループホームを含めた繋がりがこの1年間でどのように変化したかを報告する。

(倫理的配慮)

発表で使用する画像、名称の使用において全て口頭にて了承を得ている。法人の倫理委員会にて承認を受けた。

(具体的な取り組み)

三滝自由区が存在を地域へと浸透させるため、多くの地域住民の目に触れる機会の多い町内会への回覧板回覧の継続、同法人グループの施設玄関へのポスター掲示、研修会等での紹介など出来ることを行っていた。

更に2ヶ月に1度偶数月の第1日曜日に固定開催というのを継続していくことにより、関係するすべての人たちと一緒に楽しみながら三滝自由区を作り上げていった。

(活動の成果と評価)

新たな成果としては、近隣の他法人施設の職員から出店希望があったことが挙げられる。これがきっかけとなり、三滝自由区に他法人からの職員、利用者も参加するようになった。更にお互いの運営推進会議へも参加し合うようになり、そこでも交流と繋がりが生まれるようになった。

そして、元々地域住民からも出店希望があり一緒

に楽しんでいたが、そこから更に他の地域住民から出店してみたいといった要望があった。地域との繋がりがまたひとつ深まった。

こうして三滝自由区を通じてグループホームと地域との距離が縮んでいき、今度は女性会よりグループホーム職員から地域住民に対して施設の紹介、認知症について等の講座を開いてほしいといった要望も生まれるようになった。地域包括支援センターからも協力を得ながら、定期的に講座を開くようになったことでグループホームの認知度向上に繋がった。

三滝自由区の影響は更に他の地域へと広がっていくこととなる。同法人グループの当グループホームとは離れた地域で運営しているグループホームの運営推進会議で三滝自由区が存在を紹介させてもらった際に、そこでも地域住民の心に響いたのである。早速三滝自由区に視察に来られ、数か月後には地域名を冠した「千同自由区」が誕生した。三滝自由区が法人全体の盛り上げにも影響し始めていることを実感する。

(今後の課題・考察・まとめ)

三滝自由区がきっかけとなり、地域の中で新しい繋がりが生まれていることによって地域全体が元気になっていることを改めて感じている。

この繋がりを生かし、次のステップとして防災訓練を地域全体で計画出来ないかと考える。昨今話題となっている大災害が起こってしまった場合に、お互いが助け合える災害に強い地域作りがまだ完全とは言えないが、これから必ず必要になってくる。

同時にグループホーム職員も業務だけでなく地域で必要とされていると感じられて、三滝自由区をきっかけに職員自身も新たな繋がりができることによって働くことがより楽しく思えるようになることを期待している。そして、まだまだ大きな力を秘めている自由区を、今後更に地域へと浸透させてグループホームを含めた繋がりを広げたいと考えている。